

はじめに

50年の歴史を持つ本会が、高い精度管理を維持しつつ現在に至っていることは、2018年版年報(第47号)の端書きで述べたとおりである。

だが、現状維持は退歩である。今号では活性化の理念に基づき、新規事業への期待について触れてみたい。

一つはマンモグラフィに関することである。がん検診診断部長の坂佳奈子医師は精力的にその診断能の向上に取り組んでいる。高濃度乳房の多い本邦では2Dマンモグラフィの診断に限界があることから、超音波検査の併用で相互に補完し合う方法が検討されている。実際に超音波検査による死亡率減少効果を検証するRCTが数年前から行われており、間もなくその実態が解明される。しかし、超音波検査に従事する技師や読影医をいかにして確保するかという問題などが未解決であり、導入への道のりは遠い。

そこに登場したのが米国ホロジック社の3Dマンモグラフィである。この装置で乳房断層像を作像することで、高濃度乳房でも小病巣を発見できるという。米国では標準的に使用されているが、本邦を含めてアジア系の女性のデータは乏しいため、本会の坂医師が2017年度より有効性を検証する比較試験を行っている。2018年度と合わせて約6,000例を診断したところ、まだ暫定的な成績であるが、がん発見率や陽性反応適中度で良好な結果を得ており、新規事業として導入することにした。大いに期待している。

もう一つは新生児マススクリーニングに関することである。本会ではこれまで、東京都の出生児、年間10万人の公費によるマススクリーニングを実施してきた。代謝異常症(アミノ酸代謝異常、有機酸代謝異常、脂肪酸代謝異常、糖質代謝異常)、内分泌疾患が対象である。ちなみにアミノ酸代謝異常症であるフェニルケトン尿症をこれまでに39例発見し、有効な治療法により健全な生活に導いている。

2019年度は新たにライソゾーム病を検討したい。ライソゾーム病とは、ライソゾーム内の酸性分解酵素の欠損により大量の脂質、ムコ蛋白などがライソゾーム内に蓄積し、骨変形、中枢神経障害、眼障害、腎障害、心不全などの症状を呈する疾患群であり、現在60種の疾患が含まれる。このうち、酵素補充療法が確立しているファブリー病、ポンペ病、ムコ多糖症などを対象に、タンデムマス法によるスクリーニングを企図している。

これは東京慈恵会医科大学の衛藤義勝名誉教授を主任研究者とする研究事業であり、まだスクリーニングのカットオフ値が明確ではない疾患であるため、まずはパイロットスタディを行い、その精度を担保することから始める予定である。このスクリーニングが確立すればフェニルケトン尿症同様、多くの患児を救うことができる。

2019年度はさらなる飛躍の年でありたい。

2019年3月

公益財団法人東京都予防医学協会
理事長 小野良樹